

< 記 録 >

平成 16 年度 県立新潟女子短期大学 公開講座

今、英語教育・英語学習を考える

第 2 回 「動機づけ重視の英語教育を考える」

(2004.10.2)

2005 年 8 月発行

県立新潟女子短期大学 英文学科

目 次

まえがき	3
ごあいさつ	4
基調講演 (米山朝二先生)	4
シンポジウム	9
山田浩之先生の実践	9
津村 誠先生の実践	10
前田由紀恵先生の実践	12
関 昭典先生の実践	14
ディスカッション	17
米山朝二先生のまとめ	20



まえがき

平成 16 年度の県立新潟女子短期大学公開講座は英文学科が担当して行いました。英語教育・英語学習への関心の高まりがあることから、テーマは「今、英語教育・英語学習を考える」とし、以下のように行いました。

第 1 回 「インターネットを使った実践英語学習法」

会 場： 県立新潟女子短期大学 CALL 教室
日 時： 2004 年 9 月 25 日（土） 13:00-14:30、14:45-16:15 の 2 回
参加者数： 61 名（79 名申し込み）（50 名の定員を超えたため、2 回同じ講座を行いました）
講 師： 関 昭典（県立新潟女子短期大学英文学科）

第 2 回 「動機づけ重視の英語教育を考える」

会 場： 新潟県生涯学習推進センター ホール
日 時： 2004 年 10 月 2 日（土）13:30-16:15
参加者数： 57 名（78 名申し込み）

基調講演： 「今、英語教育に求められるもの」

米山朝二先生（新潟大学名誉教授、現・大東文化大学教授）

シンポジウム：「英語教育における動機づけ - やる気高める工夫 - 」

コメンテーター 米山朝二先生
シンポジスト 山田浩之先生（新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校）
津村 誠先生（新潟市立宮浦中学校、現・湯沢町立湯沢中学校）
前田由紀恵先生（新潟県立三条高等学校）
関 昭典（県立新潟女子短期大学英文学科）
コーディネーター 福嶋 秩子（県立新潟女子短期大学英文学科）

第 1 回「インターネットを使った実践英語学習法」は、短大の CALL 教室を使いながら、本学の関昭典助教授が、自宅でも気軽に取り組める実践英語学習法を説明しました。第 2 回「動機づけ重視の英語教育を考える」では、米山朝二先生の基調講演に続いて、シンポジウムを行い、小・中・高・短大の実践報告に基づきディスカッションを行いました。

一般の参加者は 2 回あわせて 100 名を越えました。英文学科の同窓生が何人も参加してくださった他、在学生も受付などで活躍してくれました。どうもありがとうございました。

この冊子は、第 2 回公開講座での議論を今後に生かすために、録音を文字化したテキストをもとに福嶋がまとめたものです。講師の皆さんにもチェックをお願いしましたが、誤りなどがありましたら、最終的な責任は福嶋にあります。なお、録音の文字化は、今春英文学科を卒業した佐藤郁美さんにお願ひしました。

県立新潟女子短期大学英文学科
福嶋 秩子

ごあいさつ

福嶋 秩子

(県立新潟女子短期大学英文学科)

県立女子短大の英文学科では、開学以来英語教育の実践をすすめ、英語教員の養成もずっとやってきました。昨今のグローバル化の波の中で、英語教育の必要性や英語学習への人々の熱意もいつになく高まっています。こういう状況で英語教育・英語学習について考える機会を作りたいと思い、今回の公開講座を企画しました。今日は新潟大学名誉教授の米山先生を基調講演の講師にお迎えし、今英語教育に求められているものは何かということ、最初にお話していただきます。そのあと、小・中・高・短大における英語教育の実践を発表していただき、討議をします。今日の公開講座のテーマの一つは**動機づけ**です。「英語が使える日本人の育成」という取り組みがされる一方、中学・高校では今度の学習指導要領で英語が必修になりました。しかし、皆が英語が好きわけではありません。そういう状況で、どういふことを、どういふふうに教えていったらいいのでしょうか。また、小学校での英語教育の必要性が言われる中で、小学校で英会話を教えるということが始まりましたが、科目ではなく総合的な学習の中で行われています。短大・大学では、非常に高度な英語の実践能力をつける必要があるということも言われています。各学校段階でどのような英語教育をやったらいいのでしょうか、そして、児童・生徒・学生たちにどのような動機づけをしたらいいのでしょうか。

基調講演： 「今、英語教育に求められるもの」

米山朝二先生 (新潟大学名誉教授、現・大東文化大学教授)

今英語教育に求められている狙いは、日本人の英語運用能力を「量的にも」「質的にも」向上させ、英語を運用できるようにすることです。もっと大勢の人が、もっとうまく英語を使いこなすようにしなければいけないということです。

小学校英語教育の是非について

最初に、最近話題になっている**小学校の英語教育**について考えてみます。この小学校の英語教育については、教育学や言語学の言語心理の専門家から否定的な意見が出るのがよくあります。日本語の習得のほう先じゃないか、まだ日本語もうまく学習していないのに、英語を導入すれば英語も日本語も両方ともうまくできないようになるのではないかと、それから日本語の思考体系が完成していないのに英語を持ってくると混乱を起こすのではないかと、いふふうな論拠が出されていますが、ほんとうにそうなのでしょうか。

まず、**多重言語使用**という観点から考えます。カナダという国はバイリンガルの国で、どの国民もフランス語と英語が使えるようにするというのが国の政策になっていて、カナダの憲法にもそう書いてあります。したがって、公文書をはじめ新聞などは英語とフランス語で同じ記事が載せてあり、街の表示もそうになっています。家庭で英語を使っている子どもたちには、学校でフランス語が使えるようにしなければならず、その逆もそうです。そうやってカナダでは 30 年近く二重言語の教育がしっかりと行われています。その一つの形態がイマージョンプログラムです。つまり、家庭の言葉が英語であれば、学校に入って、小学校一年生から、英語の授業は除いて、それ以外の全ての授業をフランス語でやるわけですね。こういうふうにして、フランス語あるいは英語にとっぴりつけさせるので、イマージョンと言っています。このイマージョンプログラムの成果が大変上がっています。問題点もありますが、いくつかのことがわかっています。一つは、イマージョンプログラムで皆第二言語が十分に使えるようになるということです。一方、母語であるフランス語あるいは英語の能力が落ちるかといえば落ちないそう

で、思考体系とか、思考力も全く落ちないそうです。二重言語のイマージョンプログラムに入った人は、いわゆる認知能力についてもかえって進歩するという結果も出ていて、これが小学校英語教育への否定的な立場に対する反論のひとつとなっています。

二つ目は、世界の 200 ケ国足らずの国々の中で、いくつの言語が使われているかということです。言語の数え方にもよりますが、3000 から 5000 の言語があるそうです。一つの国でたった一つの言語しか使わないモノリンガル、単一言語の使用国というのは、例外中の例外だそうです。3000 と見ても、 $3000 \div 200$ で、一つの国で 15 ケ国語が話されているわけですから、1 言語だけが話されている国を探すのはほとんど不可能です。つまり、誰でも二つあるいは三つの言葉を話すのは人間として生まれつき持っている能力だということです。したがって、外国語を身につけるということは決して特技ではなくて、つけないほうがかえっておかしいということになります。それでは世界中の大多数の人は母語が劣っているかと言ったら決してそんなことはありません。したがって、小さいうちから外国語を学んでも決して母語の思考体系に混乱を起こすというようなことはありません。

さて、賛成の論拠として、外国語学習は早い時期に開始した方がいいという事例やエピソードがあります。家族で外国生活をする人達の中で一番早くその国の言葉を覚えるのは一番小さな子どもで、一番年上のお父さんは一番苦労するというような話は色んな所で言われているので、外国語というのは小さいうちから身につけた方がいいということが常識的な考えになっています。しかし、そういうふうに家族で英語圏で暮らす場合は ESL (English as a Second Language の略) と言います。これはその学習者のまわりで日本語ではなくて英語がしょっちゅう話されている環境です。ESL では確かに、小さいうちに言葉を習得する方が困難無くして進むそうですが、日本の国のような、教室の英語に触れる以外には英語に触れることがめったに無いような EFL (English as a Foreign Language の略) の環境でもそうかと言われるれば決してそうとは言えません。だから早いほどいいということに、直接的には結びつきません。それでは、研究の結果でどうなっているかということ、小学生と中学生あるいは大人とで、同じ環境で外国語を学習した場合に、一番早くその外国語のある目標に到達するのは大人だそうです。小学生みたいに年がいかない人は一番遅いのです。つまり、教室で英語を学ぶ場合には、年上の人の方が進歩が早いという結果が出ています。これは発音の面に関してもそうです。一方、小さいうちから教室で英語を勉強していれば、トータルとして英語に接する時間が大量になるわけだから、結果的には、小さいうちから英語を学び始めたほうが最終的な到達度は高いという主張もあります。けれども、ある一定の期間に限って言えば、年上の方が理解力も増しているわけです。

さて、**学習期間と到達度**に関して言うと、外国語の学習は、出来るだけ短期間に集中的に身につけた方が効果が上がります。短期集中方式と長期分散方式について説明しましょう。英語の学習に充てる時間が総計 5 0 0 時間だったとしたら、この場合には、2 年間で 5 0 0 時間をみんな使うくらい、つまり毎週、毎日やって、短期集中的に外国語を学習したほうが 5 0 0 時間を 6 年間にわけてやるよりもずっと効果的だそうです。忘れる分量が少なくなるからです。そして短期間に目に見えた成果が得られる訳だから、その方が効果的なのです。しかし、小学校から英語を学習し始めると、限られた時間しか与えられていない場合には大変危険なことになります。小学校 3 年生からずると 4 年間、中学校も 3 年間、高等学校も 3 年間、また大学 4 年間、分散方式でやっていたら、覚えるよりも忘れるほうが先に立ちます。それは極端ですが、決して効率のいいやり方ではありません。つまり、学習期間というのは短く集中してやるほうがいいということです。こうなると、賛成の立場でも必ずしも両手をあげて賛成というわけにはいかないということになります。

小学校英語教育に求められるもの

私個人は小学校の英語教育に賛成です。もう遠くない将来に、日本人のかなり多くの人たちが英語を日常生活で必要とするような時期が必ず来ると思うからです。インターネット一つとってもインターネットの 8 割くらいは英語で行われています。したがって、日本人がある程度の生活水準を維持しようとしたら、はるかにもっと多くの人たちが英語の運用能力を身につけなければやっていけないよう

な状況になると思います。そのためには英語は小学校の時期から始めなければいけません。しかし、何でもいいから早いうちに英語を教えればいいということには決してなりません。それでは、小学校の英語教育にどういうことを求めたらいいのでしょうか。

まず、**教員研修**を充実させる必要があります。小学校の先生方に英語をきちんと教えられるような指導能力を早急に研修を通して身につけていただきます。それから、音楽とか図画工作とか家庭科とか体育とかの専科の教員のように、小学校の英語の専科教員をぐっとたくさん増やすということです。この方策が必要だと考えます。志願者はいっぱいいるのですが、ただお金がないということで、やらないということになっています。しかし、日本人が英語が話せるようになるというのが一つの国のポリシーであったら、そのための財政的措置は当然なされなければならないと思います。

それから**指導目標、学習内容**をはっきりとさせることです。今は、小学校でどんなことをどんなふうに何時間かけてやってもいいし、やらなくてもいい。これだと何にも成果は上がりません。小学校のうちにこういうことができるようにする、そしてこのような内容を教えるということ、国の責任としてははっきりさせなければなりません。できれば教科にするということを考えるべきです。

それから**授業時数の確保**です。今は学校によって違いますが、一年に10時間とか15時間くらい英語を教えるというところが多いです。このくらいで英語の力がつくはずはありません。そのうちに3年も4年も同じ事をやっている、またかという気持ちになってしまいます。だから、授業時数をきちんと確保することです。中学校でも週3時間ではとても英語を教えることができないという声が強いのことは、小学校の先生もしっかりと覚えておく必要があります。

小中高9年間を通した学習目標・内容の設定

さて、今求められているものの第2は、**小中高9年間を通した詳細な学習目標・内容の設定**を行う必要があるということです。今は、中学校と高等学校の連結というのはほとんど行われていません。ましてや中学校から大学、高等学校から大学はほとんど何もないと言ってもいいです。具体的には、学習指導要領を通して、詳細な学習目標・内容を設定します。どこまで英語を学習すれば、どのレベルまで達したと言えるのかという、この到達目標をしっかりと決めます。小学校6年までにこういうことができるようにする、中学校3年生までにはこういうことができるというその到達目標です。今も学習指導要領はありますが、あれはあまりにも曖昧すぎます。もっと詳細に決めなければいけません。それから、もう一点は、具体的な目標です。つまり、駅で切符が買える、とか、スーパーでパンが買えるとか、道を教えることができるとか、こういう具体的な行動目標を一つ一つ決めていきます。それも、短期間でできるような目標を決めないといけません。雲の上をつかむような、そんな目標では目標になりません。今日この時間にはこういうことができるようにしようという、そういう短期間の具体的な目に見える力としての目標を決めなければいけません。これも実は学校の先生と同時に国のほうで努力しなければなりません。

評価

さて、次に問題になるのは**評価**です。最近、**絶対評価**という言葉が**相対評価**と**対照的**に使われていますが、絶対評価というのは、あらかじめ設定した到達目標に子どもたちが達したかどうか、その到達度を尺度にして決めておいて、評価に用いるものです。たとえば中学校1年生の1学期末にはこんなことができるようにする、ということ、しっかりと決めておく、それで、そこに到達できたかどうかということでもって評価します。ところが、従来はどういう評価だったかというと、クラスの中で、上位何%に位置しているかで、5・4・3・2・1とつけました。これは**相対評価**です。最近は絶対評価ということが取り入れられるようになりました。これは、評価の目標とその到達目標を細かくしっかりと設定すれば、そこに到達できたかどうかということを見極めることができるわけだから、大変有力な評価で、相対評価よりも一歩進んだと言ってもいいと思います。しかし、これは、今、学校の先生を大変悩ませている事柄でもあります。その細かな評価をどういうふうにするかということが学校の先生に

任されているからです。したがって、学校の先生がゼロからそれを作っていかななくてはなりません。これは膨大な仕事量です。これは国で最低基準を決めなければいけないと考えます。それがないと、学校で絶対評価をやっていると言っても、その絶対評価の基準を決めるのが個々の学校の先生なので、先生によってばらつきが出てくるからです。A という学校の A という先生は、大変甘い点数をつける、それに対して B という学校の B という先生は辛い点数をつける。そうすると、絶対評価と言っても、A の学校で 5 をもらった生徒と、B の学校で 5 をもらった生徒は、中身が違うということになります。だから、これは国できちんと、少なくとも県単位、あるいは市単位で、評価基準を決めない限り意味がなくなってきました。そうでないと、それは絶対評価ではなくて、教師の主観評価ということになってしまいます。さらに、もう一つ問題点があって、それはあまり評価のことに気をとられて、毎日の授業の指導がおろそかになってしまいはしないかということです。

教科書

教科書もやはり、求められる大事な要素です。もっと教科書の内容を充実させる必要があります。中学校一年生の教科書の内容は、ペーパーバックに直して 3 ページ分の分量しかありません。これを一年かけてやっても、英語の力がつくはずはありません。中学校三年生までの英語の分量を見てみると、これもペーパーバックに直すと 20 ページくらいだそうです。高等学校には英語 ・ とありますが、までの分量は、これもペーパーバックに直すと 60 ページだそうです。3 年間かけて 60 ページの英語を読んでも、あるいは学習しても英語ができるようにはなりっこないのです。もっとも分量を増やさなければなりません。分量を増やすと難しくなるかということ、これは逆です。易しいものを繰り返し分量を増やしてやることによって自然に英語が身につくようになるのですから。それから、語彙数も、今のままでは英語は使えるようにはなりません。語彙数は今は、中学校から高等学校の段階までで、2200 語くらいですが、これを 5000 語くらいにまで高める必要があります。これを高めない限り、英語が使えるようにはならないと考えます。

接触量

さて次は、英語に接触する量を大幅に増やすことです。リスニングの量を増やす、リーディングの速度も増すようにする、ということです。これは、なかなかできないことかもしれませんが、目標として、高等学校のレベルで 1 分間に 100 語から 150 語くらい読めるようにします。これは、やればやれないことはありません。

外国語学習の意識改革

いろいろと今求められるものを言ってきましたが、最も大事なものは、英語、外国語学習に関する意識を改革するということです。それは日常生活のレベルであれば、誰でも英語は使えるようになるんだという意識を育てることです。高度なディスカッションとか何とかは別ですが、そうでなくて、working knowledge、日常生活のレベルであれば、誰でも英語が使えるようになるんだということ、これが私は真実だと思っています。特に学校の先生がこういう考えを持っているか持っていないかというのは大変大事だと考えます。しかも望ましい学習環境と、学習者のやる気さえあれば、という但し書きがつきますが、これがそろえば、英語なんて誰でも身につけられるものなのです。つまりやる気、難しい言葉でいうと、**動機づけ**という、英語をやろうという気持ちさえあれば、十分な動機づけが与えられていれば、誰でも英語は身につけることができるということなのです。

人があることを行うかどうか、またどの程度熱中して、どの程度その活動に打ち込めるか、これが動機づけです。つまり、子どもがインターネットを使い始めると、うちに帰ってきて、勉強しないでインターネットに飛びついて、目を赤くしてやっています。これはインターネットを使おうとする動機づけがきわめて高いわけです。

動機づけの過程理論

動機づけの理論には色々ありますが、ここで有力なのが、**ドルニエイ**が作った Process model of motivation (動機づけの過程理論)です。外国語学習のように、長期間にわたる学習の場合には、動機づけというのは変化します。最初は、「よし、やってやろう」なんて気持ちでいても、だんだん難しくなると、「はい、やめた」とか、「やりたくない」なんて気持ちになってしまいます。そういうわけで、動機づけというのは、長期間にわたる学習の場合には決して静的で安定したものではなく、逆に、学習の過程で絶えず変化し、高まったり低くなったりします。したがって、学習の開始時には、これから英語を学習しようとする動機づけを喚起してやる必要があります。学習の期間中には、学習をやりぬこうとする動機づけを維持し、継続させてやる必要があります。それから、学習が終った段階では、どのように学習が進んだか振り返って、そして自分で反省して次の学習に対する動機づけを高めてやる必要があります。こういうわけで、学習のいろんな段階で、動機づけを高める具体的な方策が変わってきます。

ドルニエイの理論では動機づけを 4 段階に分けています。まず最初は英語を学習する前の段階で、これは**基本的な学習環境を整備する段階**と言ってもいいです。このとき動機づけを高めるために教師はどんなことができるのでしょうか。一つは、好ましい人間関係を生徒との間に作るということです。二つめは、楽しい教室、英語を学習することによって支持的な雰囲気を作ることです。三つめは、適切な集団規準、こういうふうにしたほうがいい、こうしなければならないという集団の規準を持ったまとまりのある学習集団を作るということです。バラバラ、勝手じゃなくて、まとまりのある学習集団を作ります。

その次の段階は、**学習開始時の動機づけの喚起**ということで、いよいよ学習が始まります。そうしたら、まず、英語に対する価値観を高め、「英語を学習することは大切なんだ」という気持ちを生徒が持つようにします。それから、学習の成功への期待感を高めます。「頑張れば英語というのは誰でも勉強できるんだ」「自分も勉強できるだろう」と、こういう期待感を高めます。それから目標を明確にして、その実現に向かって努力しようとする目標志向性を高めます。つまり、これは、たとえば、中学校三年生の終わりまでにはこんなことができるように頑張りましょう、一学期の期末までにはこんなことができるように頑張りましょうと、目標をしっかりと設定し、それに向かって、学習を進めようとするわけです。次は、教材を生徒にとって、あるいは子ども達にとって関連の強いものにするということです。次は、現実的な学習者信念を育てます。これは、過大な期待を持たせないようにするということです。言葉の学習というのは、かなり努力を要するので、「半年頑張ればできるようになるよ」というようなウソは言わないということです。過大な期待を持たせないで、「しっかりと努力しないとイケないんだ」「努力を積み重ねていくとなんとかできるようになるんだ」というような現実的な学習者信念を育てるとのことなのです。

さて次は、**動機づけの維持と保全**の段階です。いよいよ学習が始まって、実際学習が毎日学校で行われているとき、どういうことができるでしょうか。まず、学習を楽しいものにします。楽しくなければ勉強しようと思いません。それから、一時間ごとに、今日はこんなことができるようになりましょう、あるいは一つの活動ごとに、この活動の終わりにはこんなことができるようになりましょうと、目標を設定します。それから、子ども達の興味をそそるような形で、学習課題を提示します。次は学習者の自尊心を大切にします。恥をかかせられるというのは、誰でも嫌いなものだから、子ども達の自尊心を大切にすることです。それから、自信を持たせるということです。それから、次は、学習者に肯定的な社会的イメージを持たせます。難しい言い方ですが、どういうことかと言うと、当惑させないということ、面目を失わせるような状況におかないということです。それから、生徒の、学習者としての自律性を育みます。

さて、次に来るのは、**肯定的自己評価の奨励**の段階です。学習が終った、あるいは一つのコースが終った、あるいは一学期が終ったという、そういう段階で、自分がどんなふうに学習を行ったかを振り返ります。その際に、先生は、学習者に対して、動機づけを高めるようなフィードバックを与える必要

があります。いい点はできるだけ多く見つけて、「こういう点が良かったよ」、それから不十分で終わった点は、「このところはもっとこうすればもっとうまくできるようになりますよ」と、そういうフィードバックを与えます。「残念だったね」ではいけません。それから、その次は、学習者が、自分の授業、学習結果を振り返って、失敗した場合は、「努力が足らなかったから、うまく行かなかったんだ」というふうに考えるようにさせます。「自分には能力がなかったからうまくいかなかったんだ」というふうに思わせません。これは、心理学では帰属理論と言うんだそうで、自分のある行為を振り返って反省するとき、「自分には能力がなかったから、できなかったんだ」と思わせたら、さらに向上しようという動機づけが失われます。したがって、そうではなくて、「自分はもっと努力すればできたはずなんだから、もっと努力してみよう」という気持ちにさせるのです。

具体的な動機づけを大切に、動機づけを維持し高めるために、先生が適切に具体的な方策を絶えず与えてやるということが、大切なのです。

今、英語教育に求められるもの、それは学習環境をより豊かなものにすること、そして、学習者の「やる気」を引き出し、高めることに集約できるのではないのでしょうか。教師として、親として、また、教育行政に携わる者にとっても、この二面の改善を目指して真剣な取り組みが求められていると思うのです。

シンポジウム「英語教育における動機づけ - やる気高める工夫 - 」

(福) 今、米山先生から、英語教育における動機づけの大事さについてお話がありましたが、小中高短大では、子ども達の実態、そして目標とする英語教育のレベルについて違いがあります。当然、動機づけの方法なども違ってくると思いますが、先ほど米山先生から説明のありました、ドルニエの過程理論にしたがっていくと、共通項も見えてくるのではないかというふうに思っております。

小学校における山田浩之先生の実践 - 子どもが「話したい、聞きたい」と思う仕組み -

小学校の英語活動は、総合的な学習の時間の中で、国際理解に関する学習の一環として行われています。文部科学省の平成 15 年度の調査によると、88.3%の小学校がこの小学校英語活動に取り組んでいます。しかし、その授業のねらいや活動の種類、教材、学年、実際やっている時間、誰が授業を行っているのか、授業の形態など、実態は学校により大きく違います。どういう指導方法がいいのかということもまだ全然明らかになっていません。それで、私も手探りの状態で実践を進めてきました。そんな私が一番大切にしてきたことは、**英語への関心や意欲を子ども達に持たせる**ということです。英語をもっと勉強してみたいとか、英語をもっと話したり聞いたりできるようになりたいというような思いが子ども達に持てるような授業を実践してみたいと思っています。小学生の発達段階からいうと、低・中学年の実践では、外からの動機づけというのはあまり有効ではなく、有効であっても長く続きません。**子ども自身が英語で話してみたい、英語を聞いてみたい、英語で聞きたい**というような、**そういう仕組みを、授業の中で作る**ことが必要です。小学校では家に帰って英語の勉強というのはあまりしませんので、授業の中で子ども達がいかに集中して取り組めるかということが大切です。この英語で話したいと思ったり、英語を聞いてみたいと思ったりするような仕組みというのは、相手に何かを伝えるとか、相手の話していることを理解するとか、そういう言語本来の持っている機能を活動の中に取り込んでいく、ということが大切なんだと思っています。

実際の授業の例 1 昨年度 4 年生で実践した授業です。子どもたちと仲の良い、そして英語しか話せないゲストティーチャーからメールをもらいます。そしてみんな一人ひとりがうちの学校の先生を紹介しようということを提案します。では、どんな表現が使えるのかなというのを、子ども達が考えていき

ます。子どもが考えた表現を元に、子どもが考えただけでは足りないところもありますので、基本の表現をつくって、子ども達に提示しました。子ども達は一生懸命これを練習していきます。ただ繰り返し言うだけでなく、基本の表現の一部を変えて、友達に話す練習もしました。さらに、自分が紹介する職員に合わせて、この基本の表現の一部を変えないといけません。そのために、その職員にあった、言語材料を子ども達に調べてもらいます。子どもは調べて、言語材料を置き換えます。ビデオにあるように、この子が一生懸命英語に取り組んだのは、自分の学校の先生を紹介したいという気持ち、そういう子どもの思いがあるんだというふうに考えています。実際にそのゲストティーチャーの前で紹介する活動の後、この子はこれからはもっと長い文でも一生懸命練習してできるようになりたい、という感想を持ちました。この子の英語への関心や意欲を高めることができたと考えています。

実際の授業の例2 現在担任の2年生で実践した授業です。子どもは絵本の読み聞かせが大好きです。楽しい物語を聞きたいと思っています。そこで、絵本の読み聞かせを英語で行います。子どもは物語を聞く中で、自然と英語に触れていきます。また2年生くらいという子ども達にとっては、絵本の絵が、その英語と結びつくための助けになると考えています。

絵本の読み聞かせの後、絵本に出てきた言語材料を使ってゲームをしました。絵本しか読んでいないのですが、子ども達は絵本に出てきた様々な場面を絵と重ね合わせながら聞き取って理解することができます。子ども達の感想から、英語への関心や意欲を高めていくことができたのではないかなと思っています。

職員朝会の実践では、英語しか話せないゲストティーチャーに、子どもが何とか附属小学校の職員を紹介しようとする中で、英語で話したいという思いを持ちました。絵本の実践では、絵本の物語を聞きたいという子ども達の思いを動機づけに使いました。子ども自身が英語で話したい、英語を聞いてみたいと思うような仕組みを授業の中に作ることが、小学校英語活動での動機づけとして大切ではないかなというふうに考えています。

(福) 総合的な学習の一環として行っていらっしゃる英会話の活動を紹介してくださいました。子ども達の意欲と関心を高めるというところに主眼が置かれた活動がありました。子ども達の話したい、聞きたいという思いが伝わってきたように思います。

中学校における津村誠先生の実践 - インプットの方法と内容の改善を通して -

中学校では意欲(自己動機づけ)は評価の対象になります。ここでの私の発表としては、その評価はいかにあるべきか、今現状はどうなっているのか、問題点はどこにあるか、ということを中心に、県中学校教育研究会で研究したものにそってお話しします。

「意欲」について 「意欲」というものは、学力を向上させるための手段ではなくて、意欲そのものを向上させることが目的です。したがって、その意欲を向上させるための手立てというものが、われわれの研修の一つの大きな課題になってきました。私は**インプットの方法とそのインプットする英文の内容を改善することによって生徒の意欲を向上させよう**、と考えました。しかし、たとえば何か外的な、お菓子やプレゼントをあげたり、あるいはシールをあげたり、こうしないと怒るぞと脅したりして成果を上げて、そこでの学習意欲は評価されるべきものなのかどうか疑問に思います。

ノートを提出しなさいと言ったときに、ノートを提出できなかった生徒は、意欲がないというとなえ方について、どう思いますか。たくさん書きなさいと言って、1回書いて提出した生徒と、たとえば7回書いて提出した生徒は、どちらが意欲があるのでしょうか。意欲があってそれをやったということは確かですし、何回もやって分かるようになったというのはいいことですが、それは英語科で考えるところの、実際にコミュニケーションを図ろうとする意欲とは違うと私は考えています。ノートをきちんと提出できたかどうかという基本的な生活習慣やその子のまじめな性格に起因する行動はコミュニケーションを図ろうとする意欲とは別物です。テストで良い点を取ろうとする意欲と、ALT(外国人指

導助手)の方たちに自分から積極的に話し掛けようとする意欲も別です。確かにテストで良い点数を取ろうと思って、人よりも何倍も努力したことは認められるべきですが、それはテストの得点に反映されているわけで、その努力を意欲として別個に点数化する必要はありません。しかし現状では、ノートを提出したか、あるいはチャイムが鳴ったときに座席についているか、教師の説明を姿勢を崩さず聞いているなどをもって意欲ととらえている節があります。それが今の問題点だと思います。

私は、子ども達がコミュニケーションの中であらわす「意欲」を示す兆候として、2つあるような気がします。それは、**自分がどこを問題点としてとらえているのか**、もう一つは、**自分自身がどうかかわろうとしているのか**、ということです。与えられた例文を一語一句覚えようとする学習意欲は確かに大事なのですが、覚えられるかどうかは暗記力の問題でしょう。一方、「おや、おかしいな」「この単語は分からないな」と言える生徒は、これを読もうとしている意欲があると考えられます。したがって、子ども達が自分とのかかわりを表明したときにコミュニケーションを図ろうとする意欲があるととらえれば、ノート提出やチャイム着席などの資料に頼らずともよいのではないかと考えています。自分がわからなかったところはここだった、こうすれば良かった、あるいは、これはどうなるのか、といった質問が出てくることこそ意欲がある証拠あるいは兆候だと思うのです。

「意欲」を促進するもの 「意欲」を促進するものとして、**自ら課題を設定することができるようにすること**、**学習内容を改善すること**、もう一つは**望ましい人間関係を構築すること**の三つが考えられます。

授業の中で、この単語が大事だとか、この構文が大事だとか、それを覚えなさい、で指導が終わってしまうのは一方的、押しつけ的です。教科書を学習した後で、自分なりにどこが大事だと思ったかを書かせ、それを使って生徒同士で会話を作っています。それから1つの単語を教えて、それを勉強してくるといふふうな一対一の対応ではなくて、ひとつの単語を教えたら、それに関係する3つ5つの単語を自分で探してくるといふのも、単語学習の際に意欲を促進させると思います。つまり自分で興味を持ったものを教科書の中から探し出して、自分で発展的に学習するということです。

次に、人間関係についてですが、ペア学習の効果的なさせ方、小黒板の有効な使い方などを私達は研究してきました。「個を活かし集団を育てる研究協議会」でそれに取り組んでいて、小学館の『中学教育』で学級活動について提案したりしています。人間関係をつくるというのは、意欲を促進させる上でとても大事です。

学習内容については、インプットの内容を改善してみました。たとえば中学校の先生が受け身形を勉強させようとした場合に、どういうインプットが意欲を促進するのでしょうか。3種類の英文を用意し、子ども達にアンケートを取ってみました。漫画に関する例文、人工例文、他教科にまたがる例文の3種類です。宮浦中学校の1年生から3年生まで60人ずつを対象にアンケート調査をしました。アンケートの主な設問は、「どの種類の英文に興味があるか」「どの種類の英文ならそれに続いて書きたくなるか」というものです。

まず、**漫画**に関する例文は、「鉄腕アトムは手塚治虫によって描かれました」とか、「のび太はドラえもんによって助けられました」とかいうものです。

人工例文というのは、よく基本文型集にあるように「この机は私のお父さんによって作られました」とか「英語は佐藤先生によって教えられています」などの場面設定のない例文です。

他教科というのは、他教科で習ったことを中学校で習う英語の構文で勉強させるというもので、「法隆寺は聖徳太子によって建てられました」とか、「金閣寺は足利義満によって作られました」など、内容が他教科にまたがるものです。

アンケートによると、75%の子ども達が、自分が学校で習った知識や話題のニュースなどを会話の中で言いたい、という希望を持っていることが分かりました。他教科で、火星の見かけの動きとか、解の公式とかを習っている生徒が英語の時間になると、「昨日は何をしたかな」といふふうに精神レベルがぐんと下がってしまうのです。イランやイラクの問題、今のアメリカの問題、日本の高齢化の問題などに対して自分の知識を持って、インターネットで他の国々の同年代の子ども達とディスカッションした

いという意欲を持っているんです。ところが、生徒がどの例文に興味を持ったかということ、漫画が一番高かったです。人工例文が一番低いですね。他教科にまたがるものは一年生が一番高く、2年生3年生とちょっと低めでした。

次に、基本文はそれだけが独立して存在するものではなくて、その前後に文章があって基本文があるのです。そこで、「続いて書きたいと思わせるような例文はどれですか」と尋ねたら、他教科が一番低かったです。これはちょっと残念でしたが、これはその他教科にまつわる自分の知識体系がまだはつきりしていないので自信がないのだと思いました。ここで人工例文が高かった、ということは、例文や構文を教えるときに、他の要素というのは極力削いだほうがいいのかと思います。われわれが一見ばかばかしいと思うような、「これはペンです」的なものも、初期の段階では、他の要素がないから、子どもにとってはいいのかな、書きやすいのかなということです。

われわれは、学ぼうとする意欲が大事だと言っておきながら、テストでは依然として知識を中心に測っています。ならば意欲がどういう形で表出するかという兆候でとらえて、たとえばリスニングテストでも「自分が気付いたこと、もっと知りたいこと」を書かせることによってペーパーでも意欲を客観的に測れないかと考えました。もう一つは、インプットする例文を、人工的な無味乾燥的な例文も大事なだけけれども、それよりももっとわれわれ中学校教師の意識を改革して、先ほどのフランスのイメージプログラムではありませんが、他教科の内容を英語で教えることができたら、子ども達はそれを学ぶ意義がわかりますし、学ぼうとするのではないかなと考えています。なお、『多教科にわたる中学校英語基本例文集』を作りましたので、ご希望のかたは私に一声掛けてください。これから先、多教科にわたる例文をどんどん子ども達に与えることによって意欲をうながしていくことができれば、生徒のアンケートでの「書きやすい例文」の、「その他教科」の数値がどんどんあがっていくのではないかなと思って、これからも私の研究課題にしようと思っています。

(福)津村先生ありがとうございました。中学校では必修教科ということもあり、評価と強く関わってきます。意欲という部分を評価の一部として考慮しなくてはいけないということで、それと絡めまして、インプットの方法と内容を改善することで意欲を育てていく、ということをお話しいただきました。

高校における前田由紀恵先生の実践 - やる気を高める工夫 -

昨年までは新津高校に9年間、その前は10年間新潟北高校に勤めておりました。タイプの違う学校に勤めましたが、いつも考えていることは一つで、わかる授業をするということ、面白い授業をするということです。ついては、いろんすばらしい先生方の実践を見ること、それからいいところがあったら遠慮なくパクるということ、生徒のやる気は先生のやる気、先生のやる気は生徒のやる気、と単純に考えています。若いころ、授業がなかなかうまく行かなくて、悩んでおりました。その時に、ある魚の研究で博士号をとった偉大な生物の先生が、「目の前にあるものをじっと見ると必ず何かわかる」とお言葉をくださいました。そこで、高校で教科書を使って英語を教えるということは、非常に無理なことをしているんだ、と認識したことが私の出発点です。言葉が分かるということに関してですが、赤ん坊はまわりのものを見たり聞いたり触ったりしながら言葉を覚えていくわけですね。だけど、高校では、ほとんど文字になっているものから覚えていこうというのですから、どだい無理な話です。それで、「どうしてできないの」と言うことをやめて、「できるわけないよね、だけど、どうしたらいい？」となげかけ、「でも分かるようになりたい、でも話せるようになりたい」と、志を宣言させるところから始めます。

分かる・鉄則その1は、**visualization** です。生徒に「絵を見なさい」と言っています。どこのクラスにもサービス精神旺盛な子がいます。仲良くなっておいて、ちょっと難しいところになってくると、「さあ出番だよ」と言って、「ここどうということなの？ちょっとやってみて、顔どういう顔なの？動いてみて、形は？」と動いてもらいます。しばしばクラスが大爆笑になったりするんですけれども、人

間は笑ったことは忘れません。分かりにくいことを分かるためには、頭の中に、文字じゃなく、画像でインプットしなさいということです。テキストを画像にして収めると、そのテキストは重さゼログラムでどこでも持ち歩けます。学校の帰り、電車待っているときに、頭の中でスイッチオンして、今日テキストで読んだことを絵にして、そしてどんな言葉遣いしてたか思い出してごらんと、言っています。生徒に甘いことは言いません。「最終的には覚えることなんだ、自分で努力がいることなんだ、だけど、こんな良い方法があるよ」という言い方をします。効果的な学習方法を教えることも自分の大事な仕事だと思っています。そのために、自分でやってみた人体実験済みの方法を紹介して、目の前で生徒にその効果を見せて、そしてやらせていくということを心がけています。

分かる・鉄則その2は、「面白い授業にはへえ～が出る」ということですね。授業で一番面白いのは、同じ教材を読みながら、「自分はこう考えたんだけど、人はこう考えた、へえ～っ」というところですね。だから、一対一でみんながそれをやっていて、全体ではそれを集めたような授業をしたい、いろんな意見が聞こえてきて、そうなのかそうなのか、とみんなが思うような授業がしたいと思っています。生徒が勝手にしゃべるわけなんですけど、授業のポリシーとして、**react-interact**、「まず教材に反応しなさい、思ったことは何でも口に出しなさい」、そして「お互いに、意見を交換しなさい」と言っています。それで、しばしば、4人グループで話し合う場面を持たせます。たとえば、非常に難解なところ、なんとなく分かるんだけど、日本語になりにくいところなどについて、「上手に日本語にしてごらん、日本語にできたら分かってるから」と言ったり、「行間を読んで、登場人物の心情を読み取りなさい」とか、「ここでこの人は黙ってるけど、もししゃべったらどういうことなの?」とか言って、グループで話し合わせたりします。また、デリケートな発問の時には、紙を配って、一人ひとりに無記名で意見を書かせたりします。生徒から自発的に出てくるものは、私達の予想をはるかに越えて面白いものです。授業の心がけとして、事前に準備したことだけを伝える授業にしたくないと思っています。事前の準備も行いますが、そこで必ず生徒と生の **interaction** があって、1時間1時間がその場でクリエイティブされる授業を作っていきたいと思っています。

話が変わりますが、もし『生徒にやる気を起こさせた大賞』というのがあるとしたら、このごろはまちがいなくハリーポッターだと思うんですね。1年生の生徒が800ページの原作を読みます。英語力が当然高まります。何でこんなに面白いのかなと思って考えてみると、プロットの脇で、たとえば学校生活の何気ないスケッチなんかには、本当にそうだなと思うことが色々あります。発見が連続的にあるということだと思いますね。授業の中でも、連続的にいろんな発見がある、刺激のある時間を作りたいというふうに思っています。

もうひとつのハリーポッターの面白さに、伏線が張ってあって最後にどんでん返しがあるということがあります。私は、そういう面白さを、1時間の授業の中でなく、クラス担任に入ると自分で計画立てて任せもらえるチャンスがあるので、3年間というスパンの中で出したいと思っています。一方、1年生では、学習習慣をつけて、文法をしっかりおさえる、2年生では、修学旅行もあるので、いろいろ体験したことを自由にどんどん表現させる、3年生では、受験準備というふうに、段階ごとのイメージを持ち、そのときそのときに必要なキーワード、キーフレーズ、キーコンセプトを設定します。それに加えて、日常の生活の中で生徒に起こるいろいろなことを取り入れていきます。つまり、授業と同じなのですが、**plan** した部分と、その場の **improvise** した部分と、両方ないと面白くないと思っているわけですね。たとえば、今だったら、月曜日にはイチロー選手のことをしゃべりたいと思っています。毎回、授業に関係ないいろんな話をしながら、生活の中に英語がある、英語から生活が読めるというようなことをやっていきたいと思っています。

ご存知のとおり、三条は7月に水害がありまして、自宅が被害を受けたという生徒がクラスに5人くらいずつおります。その本人達や取り巻く友達がいるわけですが、その生徒達のこのたびの振る舞いを見て、心からいとおしく思ったんですね。(写真を見せて)これは教務室なんですけれども、いろんなものが流れていきました。これは7月14日ですから翌日なんですけど、学校に持っていったものはいろいろ失ってしまいました。生徒も色々辛い思いをしたので、「私が元気をもらうときに読む本がある

よ」と生徒に話をしました。『心のチキンスープ』シリーズです。いろんなシリーズがありますが、奇しくも *Chicken soup for the unsinkable soul*、『沈まない魂のチキンスープ』というシリーズがあります。この中に、ある苦労人の女の子のことをほめたうえで、“She would make lemonade if life handed her lemons.”「人生が彼女にレモンを与えたら、レモネードを作るような子だ」というフレーズがあったということを紹介するわけですね。日常生活の中から拾ったことを話した、その言葉というのは、「覚えなさい」なんて言わなくても必ず生徒は覚えています。ずっと後になって、「このあいだ言った、あれはどういう言葉だったっけ」というと必ず思い出してくれます。ですから、いかに生徒の心に残ることを一生懸命発見して教室内に持ち込むかということが大事だと思っています。そして、生徒にとっては進学も大事なことでありますが、「受験のために教えているんじゃないよ、一生使える英語として教えているんだよ」ということを常々言っています。このように3年間続けていくと、「先生、こんな言葉が書いてあった」と良い言葉を持ってきてくれるようになります。「生徒が背中を見て育つ」という古い考え方がありますね。ですが、私はそうではないと思うんですね。教師が与えて与えて、その後、初めて生徒から生まれてくるものだと思うんですね。こういう3年間の積み重ねの中で、3年生で受験が終わっても、「先生、英作文書いたから見てほしい」と持ってきたり、「新聞の社説がすごく気に入ったから英訳しました」と持ってきたり、または、「歌詞を英語に直してみました」と、朝から合唱団が教務室を訪れたりします。朝からいろんな生徒が、朝も、昼休みも、放課後も、受験のことでない話でいろいろ話しにきてくれます。ある時に、生徒が、「先生、英語のオーラが出てる」と言ってくれました。先生のところに行けば、何か英語で刺激がある、そういうステーション的な自分になれるということもとても大切だと思います。まず入学したときに Congratulations! おめでとう、という言葉と気持ちをしっかりと焼きつけておきます。そして最後に、2回目の Congratulations! で卒業させます。年がら年中「勉強は大変なことなんだよ」「英語は簡単に身につかないんだよ」「There is no short cut.」「近道なんかはないんだ」「There is no miracle.」「奇跡なんかはないんだ」と、ことあるごとに言っていくわけです。そして、いろんな成果が上がってきて、卒業式の最後のHRで、“There is no short cut.” “There is no miracle.”と黒板に書いた後で There is を消して、“You are a miracle.”と、こういう言葉に書き変えて、はっとさせて卒業させていくんですね。生徒はその時は黙っているのですが、言葉は胸に残っているもので、卒業して何年たっても「先生のあの言葉」と話してくれます。新津に長くいたので、転勤することが決まった時に古い生徒があいさつに来てくれたのですが、「先生、俺持ってるよ」と言って、自分でもすっかり忘れていた、卒業するときに生徒みんなにあげた、“Never say never”というカードを見せてくれました。後から喜びがどんどん返ってくるような、そういう流れを自分で作るということが大事なことだと思いました。そして、わざわざしなくてもいいことがいっぱいあるのですが、それをあえてする、というところを生徒は感じ取ってくれると思っています。今回出した卒業生は、受験の終わった生徒からこっそりと一人ずつ、私に黙って卒業式のための合唱練習を始めまして、最後のHRで大合唱して聞かせてくれました。知識ということだけでなく、大きな温かいものの中に英語の勉強があればいいなと思っております。

(福) 高校の英語授業と言いますと、読んで訳しなさいというタイプが多いということがよく言われますが、このような面白い授業、先生が体当たりでやってくださっている授業に出ている生徒達は非常に幸せじゃないかなと思いました。

県立女子短大英文学科における関昭典先生の実践 - 動機づけと自律を重視した英語指導 -

私は、先ほど米山先生がご紹介くださったドルニエの動機づけのプロセスモデルに興味を持ち、私自身でプロセスモデルを改変したのですが、なぜそう思ったかということ、短大の学生の学習状況が把握できてきたからです。短大の英文学科の学生は、小学校、中学校、高校で英語を勉強してきた、英語が好きで英語を勉強しようと思って短大に入ってきている人たちです。しかし、その学生達でさえも、

いきなりプロセスモデルの3番目の「学習実行段階」には入れない状態です。準備体操がとても大事なんです。それで、私は実際に学生に教えるときに、いきなり英語を教えるのではなく、まず**レディネスを形成**させます。目標設定などをさせて、その後で、学習の方法を教えます。大学生ですが、これが必要なんです。そして、さらに勉強を一生懸命させた後で、その成果を試させます。目標が達成できたかどうかということを試させて、最後に先ほどの米山先生の発表の中にも出てきた帰属の段階です。

「努力した結果成功した」、あるいは、「失敗したのは私の努力が足りなかったからだ」と、そういう気持ちを起こさせます。そのプロセスを繰り返すことによって、内発的動機づけが強化されたり、自律性が強化されると心理学でも言われています。この**プロセスの繰り返し**を目指しました。

では、なぜ、準備体操が大事なのでしょう。私が県短にきたのは5年半前のことなのですが、そのときに、学生のことを知るために、いろいろな学生と話をして情報を得ました。やる気が出るような授業ではないとか、授業に工夫がないとか、クラスサイズが大きすぎる、25人のクラスサイズに対して人数が多すぎる、ネイティブの先生がいない、こういう不満を学生がよく口にしました。私は最初これを聞いたときに、単にこの学生達はかわいそうだなと思いました。しかし、同時にとったアンケート調査などで、そんなにことは単純じゃないということが分かってきました。「短大入学前の春休み、どの程度英語学習に取り組みましたか」という質問をしました。高校を終わった後で、英文学科で英語を学習しようとしている学生のデータですが、「ほとんどやらなかった」「全くやらなかった」が60%を占めるんです。さらにこれは私が県短に来たころにとった調査ですが、「授業とは関係なしに、どのくらい自分の英語力を高めるために頑張っているか」という質問に対して、あまり芳しくない結果が出ました。私が大学生の頃に比べると、学生たちの学習環境というのは非常に充実しています。たとえば授業科目だけとって、コミュニケーション、リーディング、時事英語とか様々な名前のクラスがあります。さらに資格試験もありますし、県短にはCALLもあります。そして、県短英文学科主催の海外英語研修には100人中50人も学生が参加しています。DVDも英語学習のために大変優れた教材です。とにかく多様な学習環境に恵まれています。しかし、学生が学習習慣を身につけたり、心の準備をする前にいきなり学習しても、準備体操なしでサッカーをして捻挫をするのと同じように、途中でパタンと倒れてしまうのではないかと考えました。学習の動機づけと、自律性を高める必要があると思いました。そして、私自身が自分なりに勉強した結果、導き出されたことはとても単純なことでした。自己決定した目標を目指し、自分に合った学習スキルを用いて、自己を適切にコントロールして、十分に学習に取り組み、努力した結果成功して、達成感を味わう経験、それを何度も繰り返す。これによって、**学習者の自律心が高まって、もっと英語が好きになって、もっと勉強しようという気持ちが、高まる**のではないかなと思いました。

どんな学習環境でも、その環境が楽しくなかったら、学習する気持ちが起こらないのではないかと考えています。短大でも人間関係がすごく複雑です。ですから、「その場所において自分が楽しい」、「自分はここで勉強したい」という気持ちにさせる前に学習活動に入ったとしても、そういう悩みを持っている人には響きません。そういうところもケアすることが大学でも必要とされていると思います。

まず、**目標設定**ですが、県短の英文学科の学生全員に入学直後にTOEIC IPを受験させます。好き嫌いに問わずです。強制的に受験させて何が動機づけかという疑問をお持ちになる方もいらっしゃるかもしれませんが、短大で英語学習に集中できるのは1年間だけなのです。2年目は専門の学習や、就職活動・編入試験があります。1年が勝負です。それに、入学前に自主的に勉強できていない実態があります。その学生達に内発的動機づけのアプローチで、英語学習に興味づけ、楽しさを教えることばかりやっても時間切れになってしまいます。ちょっと強引かもしれませんが、最初は完全な外発的動機づけです。しかし、外発的動機づけに基づいた学習でも先ほどのモデルにしたがって一生懸命頑張る努力の結果成功する経験をする、英語学習に対する意識は改善されていきます。1年生の4月は全員TOEIC IPを受験しなければなりません。しかし2年生の4月は、義務ではありません。それでも2002年度の入学生は、2年生になって96名中の58名、つまり64%が受験しています。2003年度入学の今の2年生は98名中68名、つまり69.4%の学生がTOEIC IPを自分で進んで受験しています。

TOEIC IP は、4000 円以上の受験料がかかります。これは、1 回目の完全な外発的動機づけとは違うと思います。内発的動機づけともちょっと違うかもしれませんが、半内発的動機づけと私は呼んでいます。

次に、**英語学習に対する意識の修正**です。学生に英語学習についてイメージさせると、非常に多くの学生が、机に向かって文法書を読む、単語を1日10個覚える、たくさん読む、ということをお答えします。しかし、このような学習は基本的に面白くありません。真に内発的に動機づけられている人にとっては面白いかもしれないけれど、少なくともできれば勉強はしたくないと思っている人たちにとっては、面白くありません。しかし、面白くなかったら、続けられません。だから、気軽に楽しく取り組める、学習活動を学生自身で考える、考えられなかったらこちらの方で情報を提供して試させるということが必要だと思います。先週の第1回の公開講座でご紹介したインターネットの学習方法というのは、その一部です。

次に**観察学習**です。これは、他者の英語学習体験から学ぶということです。県短の学生の先輩で英語学習に成功している学生がたくさんいるんですね。その学生達に事前にインタビューしたり、学習体験を書いてもらったりしてそれを学生に見せます。また可能であれば実際教室につれてきて、こういうふうに勉強しましたとしゃべってもらいます。この活動の利点は、学習方法が分かるだけでなく、「先輩ができたんだから私にもできる」という自己有能感、もしくは集団有能感が高まってくることにあります。さらに、英語学習に関する本が県短の図書館にもたくさん所蔵されています。それを学生に読ませて感想文を書かせます。一人は一冊しか読めないけれど、それをみんなで e-mail で共有すれば、何十種類のもので読めます。それはもう次の共同学習のほうに入ってしまったんですが、とにかく観察学習、よいモデルを見て学ぶということも大事だと思います。

それから、**共同学習**です。いきなり自律しろと言われても、人間はそれほど強いものではありません。一人でやろうと思っても、なかなか続かないものです。でも友達がいるからできるということもあります。学生と教師との間、また学生間で、「お互いに協力して頑張ろう」、「失敗してもいいよ気にしない」、「私達の中では失敗したことも正直に話してよ」というよう受容感に満ちた雰囲気ができれば、気分よく学習を継続できるのではないかと思います。ということで共同学習も実践しています。

最後に**学習記録**です。私の授業を受講している人は祝祭日、長期休業中含めて毎日学習記録を書きます。この目的は三つあります。一つは、まず自分の学習をコントロールすることです。コメントを書くことによって自分が何を勉強したのかということを考えることになります。二つ目は、学習の関連づけです。学生は様々な場所で様々な英語科目を勉強していて、さらに自己学習場面では授業とはまた異なるタイプの学習をします。しかし、それらをそれぞれ別個のものとして考えていると、効果は低いと思います。すべての学習が互いに目標に向けて関連しているものとして考える方が、効果は高いのではないかと考えました。「学習内容」欄に学習した内容をすべて書くことによって、それぞれの学習の関連性を見て考えるきっかけになるのではないかと考えています。三つ目は、学習時間を記録、維持することです。毎日の学習時間のところで0が三つ、四つ続いたりすると、学習記録を提出するのが切なくなってきました。しかし、それも自分を鼓舞して学習量を増やすいいきっかけになるんじゃないかなと思います。

これは**学習量**です。左側は85名、1年前期の「資格英語」受講生のデータです。1年前期の授業では、自律性とか自主性とかはあまり関係ないかもしれませんが、なぜかという、教師からたくさんの宿題が課されるからです。私の授業だけではなくて他の授業でも課されます。宿題をたくさん課す理由の1つとして先程お話しした学生の実態があげられます。春休みに勉強していない人が、入ってきていきなり勉強するはずはありません。自分で勉強しろと言って勉強しないから、宿題を与えることによって勉強方法を身につけさせるという手法をとっています。この手法によって学習量を維持させます。この時点では自律という観点ではまだ自慢できるものではありません。一方1年後期には、先ほどのサイクルの2回転目と3回転目を目指します。後期の授業では宿題は課さないで、自分で自分を制御し、学習課題を見つけ、できる限り自分自身で頑張らせます。授業にも、メールでの情報交換をしたり、感想文を皆で共有するなど、一見それ自体では英語学習とは言えないような活動を数多く取り入れています。

それでも、学生は高い学習量を維持しています。

私がずいぶん前から思っていることは、英語学習は学校教育の中だけのものではなく、学校を離れても続けてほしいということです。学校で勉強しているときにどれだけ英語力が向上しても、卒業したら英語の勉強もおしまい。これではいけないと思います。やはり、私達はプロの教師として、学生達が英語を好きになって、卒業した後も英語を勉強したいと思ってもらえるような学習者を育成することが重要になると思います。そのためには、教師がいない時でも、何を勉強したらいいかわからないという状況に陥ることなく、自分の力で学習を続けていけるような力を育成することも、われわれ教師に求められているのではないかと思います。

(福) ありがとうございます。短大の英文学科というところは、ある意味では特殊だと思います。英語をやりたいと思って入ってきた学生達という状況です。そうではあっても、自律して学習できることは限らない。どうやって、その、やりたいという気持ちを持続させることができるかというのが英文学科でやっていることです。

ディスカッション

(山) 小学校英語活動で、何とか子ども達をかかわらせてあげたいと思っているんですが、なかなかうまくできません。みなさん具体的にどんなふうに行っているのでしょうか。

(前) 英語の授業では、ひとりずつ指名していくパターンが標準的で、難しい質問になると、生徒が黙ってしまって皆が待つ場面があります。それを解消したいと思っています。基本的には一人ずつ指名することもあります。5秒とまったら、ここは難しいんだな、ということで、4人にして話し合わせます。筆者のメッセージというのが具体的に書いていない、全体から分かるようなときに、答えは日本語でも良いけど、できたら英語にできるといいね、と毎回毎回言いつづけるんです。そうすると、最初は日本語で答えていた子も、調子がいいときには英語で答えたりしてくれます。それからテキストに難しい英語があったときに、易しく言うかどうかということ、パラフレーズさせることがあるし、この場面でもし言ったとしたらどんなことをしゃべるんだろうね、ということ、4人で話し合わせたりします。米山先生のお話の中で、自尊心を大切にすることがありましたけど、生徒は、先生の授業は楽だと言います。自分が不安なときには、無理矢理発言させられることがないんですね。気軽に4人で話し合っているときに、私が歩いて、いいと思ったことを、どんどん生徒に伝えていくんです。だから、平気で間違えられるってことがあると思います。話し合わせる内容は様々です。説明文だと、小見出しをつけることによって全体をはっきりさせていこうということで、小見出しコンテストとか、翻訳コンテストとか、授業中にコンテストをしたりします。

(関) 資格英語という授業は、CALL 教室という、そういうコミュニケーション活動に一番向かない部屋でやっているの、交流というメールでの交流です。ただし、外国人の先生がやっている英語コミュニケーションの授業は非常に充実しておりまして、その中で学生は、英語コミュニケーション能力に限らず人間対人間のコミュニケーション能力というものも学んでいると思います。

(米) 教養の英語のリーディングを大学で教えております。4月に、自分で読みたいから読んだ、そういう経験を数回でもいいから、やったことのある人、手を挙げてくださいと聞きました。すると、手を上げるのはごくわずかなんです。英語はもうかなりの年数やっていますが、その学生達が今までやってきたリーディングというのは押しつけのリーディングなんですね。読みたいから読んだという経験がほとんどないんです。読まされているんですね。これはリーディングの本質ではないんです。リーディングの本質というのは、自分が読みたい、あるいは読まなければならない、読んだ方がいいというもの、自ら探して、そして読む。途中でつまらなかつたら止めるという自由もあるわけですが、それがリーディングだと思うんですけども、自分の選択権というものが全く与えられていない押しつけのリーディングしかやってないんですね。そこで私は、大学に入ってきた学生には、皆さんにはたくさん読んでもらうけれども、インターネットで、BBCとか、CNNとか、ABCとか放送や新聞のサイトで1週間に

1 回自分で読みたい記事を探して、そしてその要約を私に出してもらいたいと、要約だけ日本語で書いて出せばいいんです。しかし、それじゃ、つまらないと思うから、ぜひ友達に紹介したいと思う内容のものを選んで、クラスで発表してもらいますと。そんなふうにしてやりますと、学生は 1 セメスターでかなりのものを、自ら選んで読むという習慣がつくみたいです。これは学生にとっては初めての経験みたいです。私はもう 5,6 年続けておりますが、決して悪い反応は出てないみたいです。

(津)「かかわり合い」に関しては、たとえば私が例文を出してこれを 5 回繰り返して読んでくださいというふうなことをやるよりは、子ども達同士でインタビューゲームをさせたほうが、同じ回数であっても、生徒同士のかかわり合いになると思います。けれど、これは機械的な感じがします。「何時に起きる、何時に寝た、あるいは何時間テレビを見る」などの構文を私がやらせるよりは、子ども達同士でインタビューした方がいいと思うけれども、それはまだ mechanical であって、子ども達がやった結果を私が受けて、クラスの平均的な起床時間、就寝時間、勉強時間、テレビの時間をまたフィードバックすることによって、子ども達は自分達の生活向上に資するデータが英語のインタビューによって得られたとなるなら、meaningful involvement ができると思います。できれば、自分が英語をしゃべったことが、自分の生活のなかに入ってくるというようなことで、意欲が高まってくる、それで楽しかったというのがいいと思います。

(福)生徒同士のかかわり合いということで、様々な話題が出ました。結局のところ言語学習というのはどうしても言語操作をして、単語を覚えて文を作るということになりがちなんですが、それでも何か人間同士、生徒同士のかかわり合いということに意味を持たせたいということなんだと思います。おそらく、どの先生の実践の中にも、その視野に意味のある英語使用というものが共通のものとしてあるような気がします。

(フロア)今英語活動をやらせてもらって、ALT の先生方が現場の小学校に入ってきております。担任と ALT の二人でチームティーチングをとって授業を進めているわけですが、これを大事にしたほうが良いよってというようなポイントを教えてください。

(山)当校も週に 1 回午前中だけですが ALT の先生がいらっやっています。私自身が気をつけていることは、当然 ALT の先生のほうが私より英語のことをよく知っていらっやいますし、発音も上手ですし、だから ALT の先生の前では、私自身が学習者になります。ALT の先生から教えてもらうという立場を子ども達の前でなるべく見せるようにします。その時に、この間クラスで話題になったんですけども、水飴って英語でなんていうんだらうっていう疑問がずっと子ども達の中にあっただので、じゃこれ ALT の先生が来たら今度お聞きしようねととっておいて、ALT の先生がいらっやってその日の授業がおよそ終わったところで、ALT の先生に水飴はなんて言うんだっていうことを聞く。その時なるべく私が英語を使って聞いて、そうすると子ども達はこうやって英語を聞けばいいんだってということが分かる。何回も何回も繰り返していくとこれが分かっていくってことです。すると水飴は、water candy と言われて、なんだそのままじゃないかっていうふうになりました。

(津)ALT の方々をどんどん使うといいと思います。先生方も ALT を生き字引のように使わせてもらって感謝すればいいと思います。実は昨日県のセンターで下越管内の ALT の先生方が全部集まりました。私もそこに参加してきましたけども、ALT の希望としては、もっと教室を離れてもかかわりたいということや、自分の専門を大学で勉強されてきているわけですから、テープレコーダーの代わりじゃなくて自分の専門的なものもどんどん出したいとおっしゃっていました。またほとんど全ての ALT が、導入が終った後の活動としての TT ではなくて、できれば導入の段階でやりたいとおっしゃっています。TT は日本人教師が知識を与える前か後かについては賛否ありましたが、私は赤ちゃんに教えるときのように、分かるか分からないかは別として ALT の方々に英語をシャワーのように浴びさせてもらえる方がよいだらうと思います。私が ALT の方々と一緒にやるときに留意しているのは、私でもできることを ALT の方にやってもらうよりは、ALT の方々でないとならないという部分、つまり、この発音は通じる範囲に入っているのか入っていないのか、あるいはこの文法は通じる範囲に入っているのか、社会的レベルでは、失礼に当たるのかいないのか、そんなところをお願いしたり、あと文化背

景に基づくようなところをお願いしています。たとえば教科書本文を読むことについては、わざと ALT の方にはロボットのように読んでくれないとか、あるいはすごく悲しそうに読んでくれないとか、ドラマタイズしてもらったりします。ロボットのように読んでもらうのは英語的なアクセントをできるだけ除外し、しかし通じる範囲の中の英語だってことですので、それは子どもにとっても面白いのです。だから、日本人がやれないというか、やりたいが挑戦できないなという部分をやってもらうといいかなと思います。

(前) ずっとチームティーチングっていうのをやってきておりますが、先生によって全然違いますね。今は割と理解力のある生徒なんで、私は壁紙になりますからねって言って、時々生徒が分からないときふっと私の方を向くときだけ、出て行って補足説明を易しい英語でしてあげるようなことをしています。それでもう少し英語の分かりが悪い生徒の時には、この説明で通じなかったときにはこの説明と言って、言葉でなくて物で示せるなら物を持っていくとか、多重構造のティーチングプランを立てていたような気がします。それからついでに授業以外のことでは、私は ALT も一緒に生活しているという感覚を大事にしたいので、学校行事のときなどに ALT にとても活躍してもらいました。それから私の印象ではアメリカの ALT の人たちはゲームが大好きで、ワーツと生徒が喜んでいたらいい授業をしたと錯覚されているところがあるんですけど、もう高校生になるとあー楽しかった、でも何だったんだろうって本当は思っているんですね。だからむしろ普通の英語 とか とかりーディングのテキストの中で、読み終わったときに ALT に本当に生で感想をしゃべってもらう、とても難しいんだけど、その生の感覚ですよ。だからそのさっきも申し上げた授業の中では、人はこう違うのかっていうのを大事にして、ALT も同じことで、ALT が、本心からこのレッスンについて感想をしゃべる。難しい英語なんだけど、じゃペアで通訳ごっこねって、どれくらい聞き取れたって、ペアで確認すると 8 割は聞き取れるんですね。そんなふうにして、生で難しいんだけど、刺激をもらうっていうような感じで、取り組んでいたこともあります。

(米) 皆さんいいアイデアたくさんお持ちで、実践していらっしゃって感心しました。言語習得研究の術語である **Foreigner talk** という語は外国人言葉と日本語で訳しますが、これは外国人が分かるように話す言葉を指して使います。これは、私が日本人で日本に生まれて日本語が *native language* ですから、外国人に分かりやすいように日本語で話す能力というのは、持っておりますね。この外国人はどれくらいの日本語のレベルかなってことが、少し話をするときすぐ私らの頭に入ってきて、その外国人のレベルに合わせるように話して、日本語を通じさせるという能力、そういう能力を **Foreigner talk** と言うんです。それから **Baby talk** というのもこれが術語でして、言語習得の場合、赤ちゃんが分かるように話し掛けるお母さんの話す言葉のことを **Baby talk** と言うんですが、普通考える赤ちゃん言葉とはちがうんです。それで、ALT にぜひやっていただきたい、やっていただいた方がいいと思うのは、日本人の中学生だったら中学生のレベルに合わせてその子ども達分かるような英語をたくさん話してもらうということ。それから小学生だったら小学生が聞いて分かるようなレベルに合わせた英語を、たくさん話して聞かせてもらうということ。これをぜひ勧めていただきたいと思います。ALT は実はそういうことを望んでいらっしゃるんですけども、分からなかったらもっと易しい英語に置き換えたりですね、あるいは仕草を交えたりして何とか自分の言うことを日本人の子どもに分らせる能力というのは私ら日本人の教師よりもずっと上なわけですから、その能力をフルに生かしてもらうようにすることが一つあると思います。皆さんの中にご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、スティーブン・クラッシュンというアメリカの大変有名な言語学者がおります。彼の理論の中に **comprehensible input** という言葉がありまして、これは理解可能な入力というふうに訳しますが、言葉の習得には、聞いて分かる、ちょっと努力すれば聞いて分かるようなレベルの英語をたくさん聞くことだ。そうすると人間が持っている言葉を習得する能力が働いて、文法なんかわざわざ習わなくても次第に意味が分かるようになる、意味が分かると、言葉の構造も分かっていくんだという、こういう有名な理論があります。**comprehensible input** をたくさん子ども達に与えてもらうように授業を先生方が設計なさることが一つ大事だと思います。

もう一点は、先ほどの山田先生の大変楽しい授業をビデオで見せていただきましたが、あの中で、He is good at sing. というふうに子どもたちが言ってましたよね。そして、ALT が OK というふうに言っていました。このときですね、ALT には、He is good at sing. って言ったら Oh, I see. He is good at singing. というふうに、子ども達の言いたいことをちゃんと受け入れて、そして正しい英語でそっともう一回言い返して確認してもらおう、こういうテクニックをぜひ使っていただきたい。そうしますと、これは何度も繰り返すうちに、あ、He is good at sing. ってあの人たちは言わないんだな。He is good at singing っていうふうに言うんだなっていうことが子ども達の頭の中にも入ってきます。こういうのを recast って言うんです。言い直し。赤ちゃんとお母さんの言葉のやり取りの中には recast がたくさんあるんですよね。で、言語学者の中にも子どもは recast を通して言葉を習得するんだって言う人がいるくらいです。それをぜひやるようになさったらいいと思います。それからさっき山田先生がおっしゃったように、先生がですね、特に小学校の先生が ALT を使うときには、自分がいい言葉の学習者になって生徒に模範を示すこと。わからなかったら、I don't know. というふうに言って、I beg your pardon? と行ってこういうふうにも何度も聞いて、わからなかったときは何度も聞いて、分かったら、「あ、分かった、Oh, I see.」と言ってニコニコしてみせると、演技も多少含めた方がいいかもしれないんですけどね、こういうふうにして先生が **good language learner のモデルになる**ということが一つ大事だというふうに思います。

米山朝二先生のまとめ

4 人の先生方の実践報告や主張をお聞きしまして、先ほど示しましたドルニエの動機づけの過程理論に当てはめてみて、皆さんのおっしゃることはその中にすっぽりと収まっているということは、大変見事だと思います。もうすでに先生方はドルニエの理論を知らなくても、動機づけの大切さに気付いて、そして毎日の授業の中で、そのために具体的な指導の一環としてその考えをご自分で取り入れて、自分のものにしていらっしゃるということの一つの証であると実感しました。

山田先生は小学校の子ども達に楽しんで英語を勉強させてやりたいという、そういう思いで授業を組んでおられまして、そして子ども達のビデオの表情からもその楽しいという気持ちが十分見て取れたと思います。これがやはり、私は英語学習の最も大切な要素になると思っております。楽しいからやるんだということですね。特に小学校の場合は楽しいからやるんだという、これを大事にして、楽しいという言葉の中には様々な思いが含まれておりまして、わからなければ楽しいなんて言わないんですよ。分かるから楽しいんですよ。そして今まで知らなかった新しいことを発見したからやっぱり楽しいんですよ。その逆のこと、いつもと同じようなことしかやらなかったら楽しいなんて言いません。楽しいという言葉の中にはいろんな思いが含まれているわけですから、それを大切にすることはモチベーションを高める第一歩だと思って、感銘を深くしてお聞きしました。それから自分の言いたいことを探して、それを言うんだという、この部分もなるほどなと思っておりましたが、小学校で、それはあまりにも追求しすぎると、発言が極端に少なくなってしまうんですよ。ですから、言いたいことを探すまでに 1 時間もかかってしまうような、そういう大きなトピックは避けて、こういうことを言いたいんだなということが思いつくような、言いたいことの候補リストみたいなものをたくさん作って、よし、これは僕言いたかったんだよな、これをそれじゃ英語で言ってみようという、そんなふうなことを工夫なさるとたくさん言う機会が出てくると思いますよね。英語の学習で大切な点は、**たくさん言うこと、たくさん聞いてみる**ことだと思っております。実は私、孫がおりましてですね、2 歳になったばかりの孫がよくしゃべります。朝起きてから夜寝るまで絶えず喋り捲っております。これくらいしゃべれば言葉というのは身につきます。分からないと、もう一回、おじいちゃんもう一回、と言うんです。分かるまで。だから私は嫌になってしまいます。5 回も 6 回も言わせられますからね、それで、満足すると、「うん」なんていって、あるいは「はい」なんて気分のいいときは言いますが、ともあれ、たくさん易しいことを子ども達が、自由に言えるようにしてやる。難しいこ

とを努力して、一回だけじゃなくて、たくさん易しいことを言うてみる経験、これが私は大事だと思います。

それから津村先生は実は、大変難しい問題に四苦八苦なさっている、そのところを正直にお話くださったわけです。意欲の評価、関心・意欲・態度の評価というのは大変難しいところです。しかし、観点別評価の中にきちんと入ってしまっていますね、これは学籍に残るような形で評価をつけないといけないわけで、これは小学校の先生も中学校の先生も苦しんでいる部分な訳ですが、ですから、その部分についてご自分の経験あるいは考えをお話くださったというので、ありがたいと思っておりました。津村先生は意欲を促進するものを授業の実際に則して話をしていただきまして、自ら課題を設定する、人間関係を大切に作る、あるいは学習内容、input を改善するという、こういう具体的な点でもって、意欲を高める工夫をお話しになって、それが先ほどのドルニエの3のところ、実際の授業の中でのモチベーションを高める部分にぴったり入っていると思いますので、私は、こういうことが教育現場でも行われているんだなということを知って大変嬉しくなりました。

前田先生は、一番私は印象に残りましたのは、自分が英語が好きなんだってということですよ。英語の学習が好きなんだってということを自らしっかりと受け止めて、それを生徒に率直に投げかけている、私も努力しているんだよ、だって英語が好きなんだし。また努力することによって、満足感が得られるからという、こういう点を生徒さんたちに率直にぶつけているってところがですね。だから私もやってみようという気持ちになる生徒が出てくるんです。先生の英語に対する熱意ということが根幹になると思いますので、これが私は一番感銘を受けてお聞きしました。もちろん、生徒の中には、あの先生、英語おたくだよな、なんていう生徒ももちろんいますよね。冷やかなレスポンスは必ず出てくると思いますが、しかしそうは言いながらもですね、その生徒達の頭の中にはどこかに、何か心に残るところがあると思います。逆の反応はありますが、でもプラスの方が多いと思いますよね。だから先生がまず好きになることですね。先生が努力することですよ。それが子ども達に跳ね返っていくということは、私は念頭に置かなくちゃいけないと思います。これは子どもってというのは鋭い目で先生を見ておられますよね、先生は嫌いだけども教えてやるんだなんていうことは見抜きますよね。それから、おまえ達は教えてもどうせできないと思うけれどもと、こういう気持ちで教えないことですよ。これも生徒はピンと来ます。先生は、この子どもたちを本気になって一生懸命教えると、かなりのところまでのびるはずだという信念を失ったらそれはよろしくないことだと思いますよね。前田先生はそういうプラスの面がたくさん出て、いい授業をなさっているんだらうなと思ってお聞きしておりました。ビデオを見たいものですね、皆さん。どうでしょうか。

関さんの授業は、実践はいわゆるドルニエの理論に基づいた授業を展開しておられて、彼の授業を、もう一回ハンドアウトで見てもらうと、ドルニエ理論の勉強になるくらい理論と実践が見事に組み合わせられている。それでももちろん、学校が違いますので、小学校・中学校・高等学校で、関さん流のやり方はできるかどうかは分かりませんが、しかし学べるところがたくさんあったと思いますよね。だから具体的にどういうふうな教え方をするといいんだという、指導の細かな点まで入って、さらに実践を深めて、そして発表なされるようになさったらいいかなと思っております。ともあれ、楽しい、しかも insightful な発表をいただいて、私も勉強になりました。今日はどうもありがとうございました。

(福) 米山先生、それからシンポジストの先生方、どうもありがとうございました。今日は小中高短大という全く違った現場での、英語教育をつなげるといふかなり無謀な試みに挑戦しました。ただ、違うんだけれども共通しているところがあるということは、実感していただけたのではないかと思います。現実に小中連携、中高連携、あるいは最近は高校と大学の連携という話も出てきております。そういう意味で、これからもできるだけ機会を見て様々な現場における英語教育について情報交換をしていく必要性を感じたところです。本日は皆様どうもありがとうございました。

以上

< 記 録 >

**平成 16 年度 県立新潟女子短期大学 公開講座
今、英語教育・英語学習を考える
第 2 回 「動機づけ重視の英語教育を考える」
(2004.10.2)**

発行日 2005 年 8 月 25 日
編集・発行者 県立新潟女子短期大学英文学科

連絡先 〒950-8680 新潟市海老ヶ瀬 471
県立新潟女子短期大学英文学科
電話 025-270-7160 (福嶋研究室)
FAX 025-270-5173 (短大事務局)